Ⅳ　柳沢遺跡出土銅戈の位置づけ

吉田　広

柳沢遺跡からは、銅鐸５点と銅戈８点が出土し、銅戈は所謂九州型１点と近畿型（吉田編 2001）７点からなる。まずはこのような銅戈のセットの意義を理解するために、各個体の位置づけを明確にすることから始めよう。

１　１号銅戈の位置づけ

１号銅戈は、樋が先端で合致し、樋内に界線と有軸綾杉文を鋳出すなど、九州型の銅戈である。法量的には、援長 31.4cm、鋒で最大幅 5.7cm を測ることから、「およそ援長 30 ～ 32cm で、刃部両側はほぼ平行からわずかに鋒近くで幅を増す（吉田編 2001）」中細形Ｃ類に該当する（表１）。Ｂ面内には、外向背中合わせ２段の鉤状文と特徴的な文様が鋳出されており、同じ文様はこれまで知られてなく、現時点で同笵品はみあたらない。

２　２～８号銅戈の位置づけ

近畿型の範疇に含まれる銅戈７点については、既出の近畿型銅戈を含めた異同が小さくなく、その位置づけをまずは定めておく必要がある。

（１）近畿型銅戈への設定

近畿型は、そもそも三木（1969）によって大阪湾型銅戈として設定された。当初は、左右両側の樋が先端で合致しないことと、樋内に複合鋸歯文（組紐文）が鋳出されることに注目された。その後、岩永（1980）がａ、ｂ、ｃに細分し、さらに難波（1986）が大阪湾型銅戈の特徴として以下の特徴を指摘した。すなわち、①刃を垂直に研ぎ落とさず、研ぎ出す。②樋の先端が合わず、多くは脊に鎬がある。③樋が直線的で側刃の幅が関近くで大きくなる。④樋に斜格子文・複合鋸歯文を鋳出す。⑤内が横長である。⑥関と身の斜交が著しい。吉田編（2001）でもこれらの特徴を踏まえながら、「近畿型」の別呼称を採用して細分を行った。今回の柳沢銅戈出土を承けての細分は後論するとして、柳沢銅戈が難波（1986）の指摘した諸特徴に合致し、大阪湾型あるいは近畿型に位置づけられることは間違いない。

さて、これまで近畿型銅戈の初現と位置づけられてきたのは和歌山県山地出土銅戈（森田編 2005）である。出土当初から、柳沢銅戈と山地銅戈の類似性が指摘され、柳沢銅戈の詳細検討を経た上でもその指摘は首肯できる。ただ一方で、看過できない差異も少なからず存在する。何より近畿型に位置づけられる柳沢銅戈７点の形態差が大きい。柳沢銅戈の型式学的位置を明確にするために、柳沢と山地の各銅戈諸特徴と異同を確認した上で、型式学的検討を行わねばならない。

（２）柳沢銅戈における再加工

この検討を行う前に、柳沢銅戈で顕著であった以下の諸特徴をいかに理解するか、明確にしておく必要がある。鋒部を中心とした刃端部両面からの面取り状加工、鎬の不明瞭さ、刃部横断面の中膨らみ状況、一部にみられる刃部縦断面における樋先端部以上での痩せである。これらは、鋳造直後の形状あるいは鋳造直後に刃研ぎを施された形状とは明らかに異なる。刃部縦断面に最も端的に表れているように、その原因が鋳造不良による場合も含めて、再加工による変形である。したがって、型式学的位置づけを行う上で、再加工に伴う特徴はまず除外しておかなければならない。また、樋底の身主軸方向の研磨による一部陽出

文様の消失も、鋳造直後とは異なる姿への改変とみなすことができよう。なお、鋒部を中心とした刃端部両面からの面取り状加工については、中部高地の戈形石製品に顕著に認められるとともに、武器形青銅器では滋賀県下之郷遺跡出土平形Ⅰ式銅剣（守山市教委編 2001）に見ることができる。

では、再加工の程度をどのくらい見積もるか。鋒部を中心とした刃部には、面取り状の研ぎ落としがなされており、平面形の改変を大きく見積もることも可能である。しかし、縦断面形からは鋒部でこそ顕著な厚みの減があるものの、身下半ではそれほど顕著で不自然な脊厚の減はない。樋先端部の様子にしても、柳田（2008）が想定するような、樋先端合致という形態から樋先端が離れる現状に推移した可能性は低い。九州型の中細形Ｃ類にあたる１号銅戈の縦断面を観察すると、樋先端部では脊自体も厚みを減じ、鋒部との段差は小さくない。この段差を解消するほど再加工を進行させたなら、鋒部の厚みの減はもっと大きく、長さはさらに短くなったはずである。何より、樋先端部より下方から脊厚の減が認めなければならないが、柳沢２～４号の脊痩せは樋先端部以上の鋒部にほぼ限られる。したがって、九州型の細形に既に出現しており、中細形以降に定型化した樋脊収束部の造形が、柳沢銅戈の鋳造直後に存在したとはできない。ただし、福岡県吉武高木３号木棺墓出土銅戈（力武・横山編 1996）でみられるような、樋脊収束部と鋒にあまり段差のない定型化以前の形状、あるいは柳田（2011）が示した韓国論山市松堂里銅戈のように、脊横断面の丸い膨らみが鋒部へと連続していくような形状であれば、樋先端分離への形状変化も想定可能かもしれない。しかしその場合でも、柳田（2008）が吉武高木３号木棺墓銅戈で提示するように、鎬の乱れ・不明瞭化は避けられず、そのような状況までは、柳沢銅戈･山地銅戈に見いだすことはできない。したがって、柳沢銅戈・山地銅戈の現状による限り、初現期の近畿型銅戈は、鋳型に彫り込まれた時点から、脊幅が減じて両側樋の近接することがあっても、樋先端は分離した形状であったとするのが適当である。柳沢銅戈は、そのような形状であったものに、鋒部を中心として再加工が施されたのである。

（３）近畿型銅戈における柳沢銅戈

以上を踏まえ、柳沢銅戈を中心に関連資料の計測値および諸特徴をまとめた表２の整理に基づきながら、柳沢の近畿型銅戈での位置づけを行っていこう。

まず、三木（1969）以来近畿型の特徴とされた樋先端分離はいずれの個体においても共通するものの、いま一つの特徴である樋内の文様については、かなりの異同がある。基本は穿上に斜格子文帯をもち、その上位に複合鋸歯文で樋内全域を埋めるものである。柳沢未出時には山地２～６号がこれに該当し、典型とみなしてきた。そして、１号のみが複合鋸歯文を欠き、この相違が両者の法量的大小差とも一致し、細分が予想されていたところであった。ところがこれに柳沢の諸例を加えると、樋内文様の変異がとたんに激しくなる。山地２～６号と同じ斜格子文帯・複合鋸歯文をもつのは柳沢５・６（・８）号、柳沢２・７号では斜格子文帯のみ、柳沢３号は複合鋸歯文のみであるらしく、柳沢４号では複合鋸歯文と軸線が重なる。さらに細かく見れば、斜格子文帯自身が上下を横区画線で囲むのに加えて、その上下に横線を加える場合が多く、これが各個体内でさえも一様でない。山地２～６号ではやはり通例的に上下に各１線ずつ加えるが、柳沢５・６号では上位にのみ２線、柳沢８号は片面に斜格子文帯をもつ可能性を残すが、もう片面は穿上に１条の横線を入れて、その上位はすぐ複合鋸歯文となる。さらに斜格子文帯のみで複合鋸歯文をもたない７号でも斜格子文帯上に１線が加わるなどである。以上のように、山地が比較的まとまった定型化した文様構成をとるのに対し、柳沢ではかなりの多様性がある。

このような樋内文様は、分類細目としての位置を低くせざるを得ない。替わって、再加工による影響をあまり被っていないとみられる法量的な視点から、柳沢銅戈内で細分を試みる。まず、大型と言えるのが

表１　中細形Ｃ類銅戈関係一覧表

	全長	援			樋長（ｆ）				刃部（ｆ）＝50位置				脊厚	内		胡			斜交度	重量	文様		脊鎬
		長	最大幅	最小幅	Ａ面		Ｂ面		Ａ面		Ｂ面			長	幅	長	幅	厚					
	（ａ）	（ｂ）	（ｃ）	（ｄ）	左	右	左	右	脊幅	鎬幅	脊幅	鎬幅		（ｇ）	（ｈ）	（ｉ）	（ｊ）	（ｋ）	（ｍ）		樋内	内	
柳沢１号	343	314	57	45	162		165		14.5	25	14.5	25	7	23	25	113	13	5	96	286	界線＋有軸綾杉文	有	無
隈・西小田１号	369	334	59	49	171									27	24	115	18	7	97		界線＋有軸綾杉文	有	無
隈・西小田２号	319				165										19						界線＋有軸綾杉文	有	無
隈・西小田３号	318	291	52	44	153		149		11.5	19.5	12.5	20		23	21	105	16	4	95		界線＋有軸綾杉文	有	無
隈・西小田４号	324	299	45	41	158		156		12.5	19.5	11.5	20	7	21	23	98	20	4	97		界線＋有軸綾杉文		無
隈・西小田５号	340	310	54	47	165		163		11.5	21.5	12.5	21		26	24	12	16	4	94		界線＋有軸綾杉文	有	無
隈・西小田６号	333	302	55	49	163		163		12	22	12.5	23.5		24	22	113	19	5	94		界線＋有軸綾杉文	有	無
隈・西小田７号	332				153										21						界線＋有軸綾杉文	有	無
隈・西小田８号	332	302	49	43	154		157		9.5	21	10.5	21	6.5	25	23	114	18	5	94		界線＋有軸綾杉文	有	無
隈・西小田９号	339	313	59	50	159		159		13	23	13.5	22.5	5.5	22	22	113	17	4	95		界線＋有軸綾杉文	有	無
隈・西小田10号	324	299	54	46	150		153		13	22.5	13.5	22		21	24	110	16	4	93		界線＋有軸綾杉文		無
隈・西小田11号	336	306	53	47	162		162		13.5	26	13.5	26.5		26	20	115	18	4	94		界線＋有軸綾杉文	有	無
隈・西小田12号	324	298	51	44	151		151		12.5	22.5	12.5	22.5		22	24	111	17	4	98		界線＋有軸綾杉文		無
隈・西小田13号	366	338	55	45	171		169		14	24.5	13.5	23.5		23	21	127	19	5	93		界線＋有軸綾杉文	亀？	無
隈・西小田14号	367	338	63	50	171		172		14	25.5	14.5	24.5	6	26	26	118	17	3	96		界線＋有軸綾杉文		無
隈・西小田15号	318	293	52	47	156		158							20	18	105	14	5	94		界線＋有軸綾杉文		無
隈・西小田16号	317				139										21						界線＋有軸綾杉文		無
隈・西小田17号	347	320	57	47	177		170		13	20.5	12.5	20		23	23	119	17	4	98		界線＋有軸綾杉文	有	無
隈・西小田18号	336	304	52	47	164									26	26	114	16	5	96		界線＋有軸綾杉文	有	無
隈・西小田19号	320				159										19						界線＋有軸綾杉文		無
隈・西小田20号	322	296	52	46	156									21	18	(91)	14	5	95		界線＋有軸綾杉文		無
隈・西小田21号	(360)				161										20						界線＋有軸綾杉文	有	無
隈・西小田22号	329				153										19						界線＋有軸綾杉文	鹿	無
隈・西小田23号	339				174										26						界線＋有軸綾杉文	有	無
住吉神社蔵１号	346	317	54	49	165									24	21	114	―	5	94		界線＋有軸綾杉文		無
住吉神社蔵２号	343	314	57	49	171									25	22	124	―	5	98		界線＋有軸綾杉文		無
住吉神社蔵３号	323	296	57	47	157									21	18	95	14	7	94		界線＋有軸綾杉文	有	無
住吉神社蔵４号	336	303	53	45	163									26	22	120	―	6	97		界線＋有軸綾杉文		無
住吉神社蔵５号	334	303	56	48	163									24	22	118	20	6	94		界線＋有軸綾杉文	有	無
住吉神社蔵６号																					界線＋有軸綾杉文		無
三並ヒエデ１号	307	277	47	46			147				11	22		25	20	99	16	5	95		界線＋有軸綾杉文	有	無
三並ヒエデ２号	314	292	54	48	150				12.5	22.5				18	22	114	17	4	96		界線＋有軸綾杉文	無	無
三並ヒエデ３号	337	309	50	42	160				13	20				24	23	114	16	4	96		界線＋有軸綾杉文	無	無
三並ヒエデ４号	357	323	54	46			168				12.5	24		29	25	118	16	5	97		界線＋有軸綾杉文	有	無
久里大牟田	(330)	307	50		174									(18)	22	123	17	5	94	367	界線＋有軸綾杉文	無	無

表２　近畿型銅戈一覧表

	全長	援			樋長（f）				刃部（f）＝50位置				脊厚	内		胡			斜交度	重量	文様		脊鎬
		長	最大幅	最小幅	A面		B面		A面		B面			長	幅	長	幅	厚					
	（a）	（b）	（c）	（d）	左	右	左	右	脊幅	鎬幅	脊幅	鎬幅		（g）	（h）	（i）	（j）	（k）	（m）		樋内	内	
柳沢２号	236	224	―	―	137	136	135	133	12	27	13.5	27.5	8.5	8	25	(85)	13	4	100	295.7	斜格子文帯	無	(無)
柳沢３号	252.5	232.5	47.5	45	120	122	124	127	12	25	12	24.5	6	15	22	107	12	4	101	256	複合鋸歯文	無	(無)
柳沢４号	221.5	204	46	44	125	123	127	128	11.5	25	12	24.5	6.5	14	22	115	11.5	4	101	241	軸線＋複合鋸歯文	無	(無)
柳沢５号	271	248	―	―	141	141	138	139	12.5	27	13.5	28	7.5	19	28	109.5	13.5	4	100	331.5	斜格子文帯＋横２＋複合鋸歯文	無	(無)
柳沢６号	323	296	57.5	56	146	145	151	153	14.5	32	14.5	32.5	7	16	40	124	13	5	110	502.6	斜格子文帯＋横２＋（複合鋸歯文）	無	有
柳沢７号	360.5	335.5	65	63	150	150	152	153	13.5	32.5	12.5	32.5	7.5	19	31	176	14.5	6	104	713.5	斜格子文帯＋横１	無	有
柳沢８号	(79)	(59)	―	―	(58)	(57)	(56)	(58)	10	18.5	11	19	6	14	28	93	11	6	102	(84)	斜格子文帯ｏｒ横１＋複合鋸歯文	無	無
山地１号	325	300	57	53	154	150	154	155	13	28.5	13	29.5	9.5	18	28	(135)	15	7	103	673	横１＋斜格子文帯＋横２	無	有
山地２号	287	267	46	44	122	120.5	124	124	13	22	13.5	22	7.5	16	24	(93)	12	3	103	342	横１＋斜格子文帯＋横１＋複合鋸歯文	無	有
山地３号	284	264	44.5	43.5	134	133	132.5	132.5	13	24.5	12.5	24.5	7	15	22.5	(98.5)	12	5	102	359	横１＋斜格子文帯＋（横１）＋複合鋸歯文	無	有
山地４号	286	267	44	42	137	137	139	(139)	14	26	13	24.5	7.5	15	22	(93)	10.5	4	101	347	横１＋斜格子文帯＋横１＋複合鋸歯文	無	有
山地５号	(284)	(269)	―	―	141	141	144	146	13.5	25.5	14	24	7.5	12	23	(73)	11	3	103		横１＋斜格子文帯＋横１＋複合鋸歯文	無	有
山地６号	291.5	273	―	―	142	142	145	146	14	―	13.5	―	7.5	14.5	23	(51.5)	11.5	4	103		横１＋斜格子文帯＋横１＋複合鋸歯文	無	有
上諏訪神社蔵	247	227	―	―	(120)	118	118	120	10.5	20.5	10	20	5.5	12	22	(90)	7	6	100	127.9	斜格子文帯＋複合鋸歯文	鹿・鋸	無
服部鋳型	(55)	(55)	―	―	―	―	―	―	(13)	(25)	―	―	(7)	―	―	―	―	―	―		-	-	-
	(51)	(51)	―	―	―	―	―	―	(13.5)	(25)	―	―	(6)	―	―	―	―	―	―		-	-	-
三ツ俣	(77)	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	100		斜格子文帯？	―	―
八木連西久保	(77)	―	―	―	―	―	―	―	10	―	10	―	8	―	―	―	―	―	103		-	-	-
桜ヶ丘１号	272	253	47	45	146	148	140	140	11	28	10.5	26.5	3.5	14	23	115	8	5	101		横２＋複合鋸歯文	無	無
桜ヶ丘２号	275	255	51	48	151	152			9.5	27			3.5	15	23	116	7	5	99		横２＋複合鋸歯文	無	無
桜ヶ丘３号	280	265	50	48	168	169			7	26.5			2.5	11	18	115	6	4	99		横２＋複合鋸歯文	無	無
桜ヶ丘４号	282	259	50	47	177	173			9	27			2.5	18	22	114	5	5	98		横２＋複合鋸歯文	有	無
桜ヶ丘５号	277	262	47	45	148	147			10	26			3.5	11	22	108	7	4	99		横２＋複合鋸歯文	無	無
桜ヶ丘６号	283	265	48	47	154	154			7.5	25.5			3	14	19	110	5	4	100		横２＋複合鋸歯文	無	無
桜ヶ丘７号	290	271	53	46	167	169			8	28.5			2.5	15	19	110	4	4	98		横２＋複合鋸歯文	無	無
保久良神社	239.5	229	30	29			137	(133)			6.5	18.5	2	7	13	80	4	3.5	100		横１＋複合鋸歯文	無	無
瓜生堂	242	233	33.5	31.5	120	122	(108)	114	5.5	22.5	5	21.5	1.5	7	8	75	2	2	101		横２＋複合鋸歯文	無	無

柳沢６・７号。樋内の文様は斜格子文帯のみ、あるいは複合鋸歯文があったとしても、意図的に磨き落とされていた可能性が高い。脊上には鎬が立つようである。これら以外は小型となるが、援長や刃部の鎬幅や脊幅でさらに細分できる。柳沢２・５号は樋長 14cm 前後で刃部の鎬幅や脊幅は柳沢３・４号より一回り大きい。中型としよう。樋内文様は、２号で斜格子文帯しか見られないが、５号では明確な複合鋸歯文が鋳出される。脊上に鎬は立たない。対して柳沢３・４号は樋長 12cm 台、さらに刃部の鎬幅や脊幅も小さい。８号は刃部の鎬幅や脊幅がさらに小さく、これも含めて小型とする。文様は３号で複合鋸歯文、４号で複合鋸歯文に軸線、８号は斜格子文帯と複合鋸歯文と変化に富む。やはり脊上に鎬は立たない。なお、柳沢３・４号には同笵の可能性も指摘されているところである。

（４）近畿型銅戈細分再考

さて、柳沢銅戈を大中小に３分したが、この細分案を山地にまで広げると、山地１号が大型、２～６号は中型ということになる。山地２号は樋長が小さいが、刃部の鎬幅や脊幅から小型ではなく中型に位置づけておくのがよい。

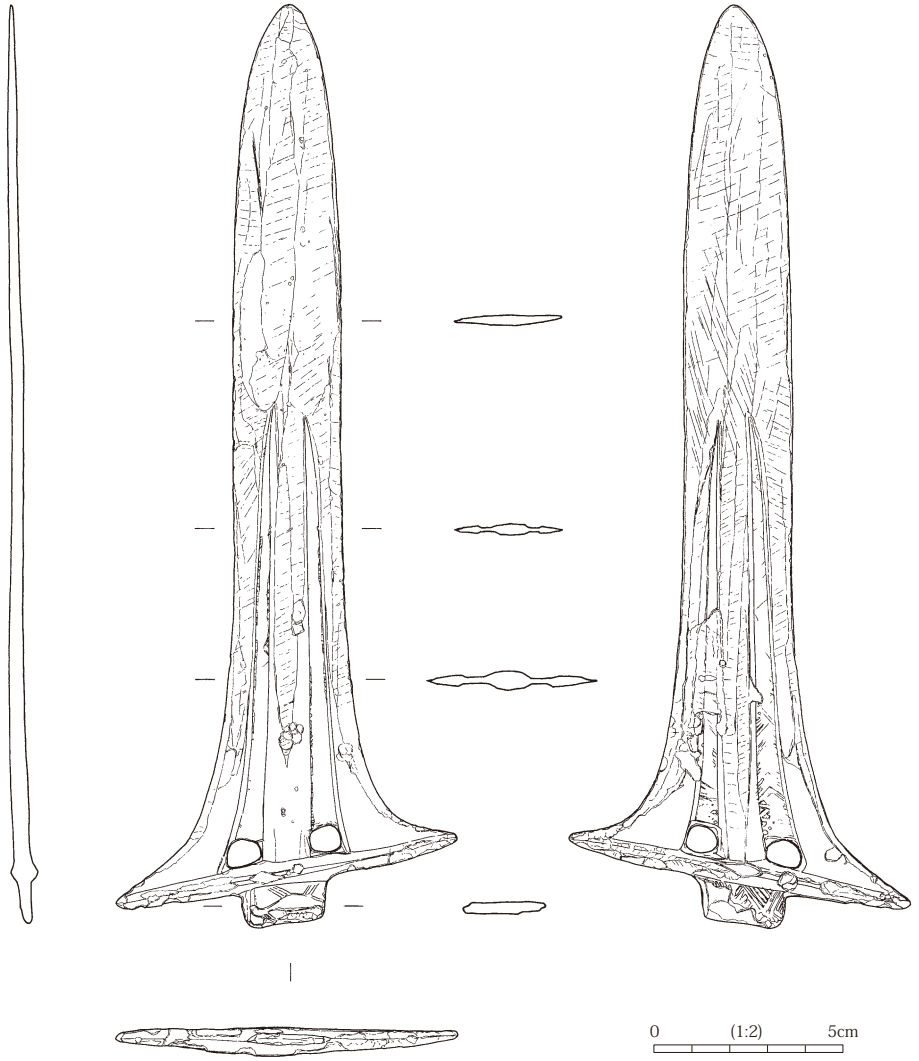
ところが、実はここで問題が生じる。大型は柳沢・山地いずれでも、脊上に鎬が立つことで一致しているものの、中型では柳沢で鎬が立たず、山地で立つという相違が生じてしまう。吉田編（2001）以来、脊上鎬の有無で近畿型銅戈を大別してきたのに、その大別指標における相違が、中型とした中に混在してしまうのである。上述してきた大きさによる細分を無効とするか。否である。柳沢７本と山地６本のまとまり、とりわけ山地２～６号と柳沢５号には、脊上鎬の有無以外、大きな差異は見出せない状況がある以上、新たな資料の増加によって、分類指標を見直すべきである。脊上鎬の有無を近畿型銅戈分類の最大指標とすることは放棄しよう。

では替わって、近畿型銅戈大別の指標はどこに求められるか。それは、他の明確なまとまりである兵庫県桜ヶ丘７本など、吉田編（2001）でⅡ式ｂ類あるいはⅡ式ｃ類とした諸例との最大の相違点を見い出すことでもある。身の厚さにもかなりの差があるが、それ以上に、武器形のより本源的要素にあたる刃部研磨にこそ差異が見いだせる。すなわち、柳沢と山地では、刃端部から鎬に向けて厚さが増し、再加工等により横断面に膨らみをもつこともあるが、刃部を平滑な面に仕上げている。これに対し、桜ヶ丘ほかでは、鎬が鋳出し鎬であるものの、刃部は端部から鎬まで平板で鋳放し面の凹凸を顕著に残し、平滑な面に仕上げようという意識を読み取ることができない。この差異を最大限評価し、前者を近畿型Ⅰ式、後者を同Ⅱ式と、脊上鎬有無の分類から読み替えることとする。そして近畿型Ⅰ式は、小型としたものをⅠ式Ａ類、中型をⅠ式Ｂ類、大型をⅠ式Ｃ類と細分設定する。なお、刃部鎬が突線化した近畿型Ⅲ式は吉田編（2001）の分類をそのまま踏襲する。

（５）周辺関連銅戈の位置づけ

そうしたとき、柳沢・山地と桜ヶ丘ほかの中間に位置する長野県上諏訪神社蔵銅戈と滋賀県服部遺跡出土銅戈鋳型、そしては群馬県八木連西久保遺跡出土銅戈と同三ツ俣遺跡出土銅戈の位置づけについても言及しておく必要がある。さらに加えて、柳沢以後に出土した兵庫県雲井遺跡出土鋳型状石製品についても、言及しておきたい。

上諏訪神社蔵銅戈（図１）は、神社に伝世してきたもので、出土などの来歴は不明であるが、近在での出土を想定してよかろう（両角 1933、大場 1949、桐原 2007）。樋が先端で合致せず、樋内は磨き落とされているが、斜格子文帯と複合鋸歯文の鋳出が確認でき、斜交度も 100 度と近畿型の特徴を備える。内はＡ面に角をもつ四足獣つまり鹿が鋳出され、Ｂ面にも複合鋸歯文が施される。鎬はややあまいものの、刃部が平滑に磨き上げられ、Ⅰ式に位置づけられる。法量から細分位置をさらに絞り込むと、援長



大町市海ノ口上諏訪神社所蔵銅戈（大町市文化財センター保管）吉田　広実測

		全長	援			樋長			刃部			内		胡			斜交度
			長	最大幅	最小幅	左	右	平均	脊幅	鎬幅	脊厚	長	幅	長	幅	厚	
		（a）	（b）	（c）	（d）	（f）			（f）＝50位置			（g）	（h）	（i）	（j）	（k）	（m）
上諏訪神社蔵銅戈	A面	(245)	(227)	—	—	(120)	118	復120	10.5	20.5	5.5	12	22	(90)	7	6	100
	B面	復247	(227)			復118	復120	復119	復10	復20		12				6	
		脊上鎬				樋内文様								内文様			重量
	A面	なし				斜格子文帯？＋複合鋸歯文								鹿			127.9
	B面	なし				斜格子文帯＋複合鋸歯文								複合鋸歯文			
	備考	・身全体出土後表面を削ぎ取るような改変。 ・鎬はあまい。 ・樋内斜格子文帯・複合鋸歯文の痕跡あり。 ・A面内に下向き（胡側を下にする）鹿の凸画（四足と角）。B面には複合鋸歯文。															
実測者		吉田　広				実測年月日						１９９８.１０.４,２０１０.１.１３					

図１　大町市海ノ口上諏訪神社所蔵銅戈

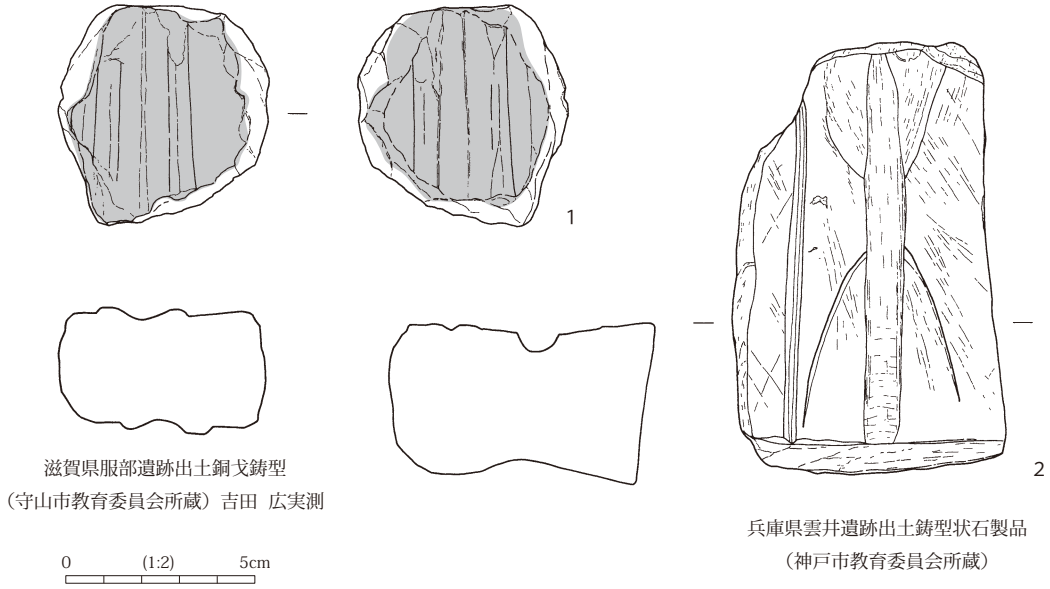


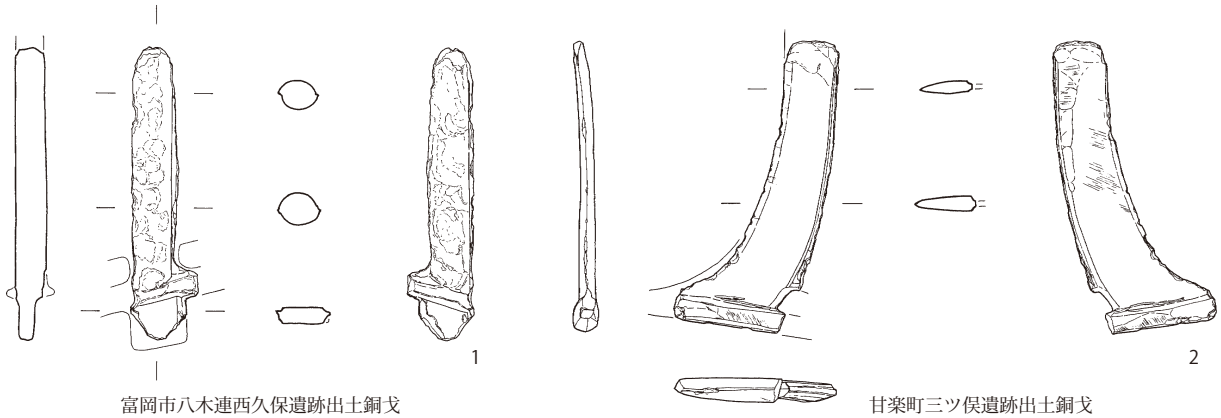
図２　近畿型Ⅰ式銅戈関連資料

22.7cm、樋長は 12cm 前後、刃部の鎬幅や脊幅も若干小振りで、Ⅰ式Ａ類でも最小例となる。

服部鋳型（図 2-1）は、Ⅳ期前葉の隅丸方形竪穴式住居から出土（大橋・山崎編 1986）。やや黄色みを帯びた砂岩質の石材両面を用い、両面とも鋳型面は激しく黒変している。脊を中心に両側刃部鎬が確認できるが、銅戈外形にあたる刃端部は全く残っていない。樋内に文様の彫り込みはない。刃端部から鎬に向けて厚さを増し、Ⅱ式の平板な鋳上がりとならないことから、断面形状はⅠ式の範疇となる。両面とも刃部鎬がわずかに下方に開き始めることから銅戈援中央部にあたり、中央部で脊幅 1.3cm 前後、鎬幅 2.5cm、復元脊厚 0.6 ～ 0.7cm を測る。残存する刃部幅は最高 1.4cm を測り、あまり小型ではない。樋先端部や内の様相、身の斜交度、特徴的な樋内文様といったものが窺えず、そもそも近畿型銅戈に含められるのかどうか判断できないが、仮に近畿型銅戈の範疇に含まれるとするなら、Ⅰ式Ｂ類の可能性が最も高いことになろう。

八木連西久保銅戈（図 3-1）は、後期樽式期の角丸長方形の竪穴式住居から出土した（長井・湯原編 1999）。脊と内が残るのみで、表面の遺存状況もよくない。かつては、小型で脊の厚さが比較的あることから、細形Ⅱ式ｂ類に位置づけた（吉田編 2001）。しかし、柳沢銅戈の出土を承けて再検討すると、復元される身の斜交度は 103 度と大きく、近畿型と特徴を共有する。ただし、それ以外に型式を特定する特徴は見出しがたく、細形銅戈である可能性もなお否定できない。それでも脊幅と脊厚の値は、近畿型Ⅰ式の変異の中に収まり、近畿型Ⅰ式の可能性も想定されてよかろう。

三ツ俣銅戈（図 3-2）は、古墳時代鬼高期の玉作工房住居出土。床面より約 13cm 浮いた状態で出土したが、他の遺物出土状況から流れ込み等とは考え難く、本来からこの住居に伴った遺物と考えられている（小安 1995）。銅戈刃部片側下半の断片で、胡に接する刃部下端に鏨等の打ち込み痕跡が残り、胡上面を平滑に磨き落とし、刃部を丸く鈍く磨き直している。出土状況に対応して古墳時代滑石製玉作に伴う再加工とかつては考え、磨き直された刃部幅を勘案して、九州型の中広形銅戈に復元していた（吉田編 2001）。しかし、刃部の丸みをもった研ぎ直しあるいは摩滅は、柳沢銅戈に共通する。斜交度も 100 度以上と九州型より近畿型銅戈に共通し、刃幅も柳沢銅戈の変異幅の中に収まる。そして、穿上位に上下約 1 cm の間隔で横線が鋳出されており、斜格子文帯の上下を区画する横線の可能性が指摘できる（吉田 2010）。以上のよう



富岡市八木連西久保遺跡出土銅戈
（富岡市教育委員会所蔵）　吉田　広実測

甘楽町三ツ俣遺跡出土銅戈
（甘楽町教育委員会所蔵）　吉田　広実測

図３　群馬県出土の銅戈

0　(1:2)　5cm

な諸特徴から、三ツ俣銅戈を近畿型銅戈Ⅰ式に含めることができ、刃部幅や厚さからⅠ式Ｂ類とすることができよう。

雲井鋳型状石製品（図 2-2）は、中期前半から中頃の包含層出土。シルト岩もしくは泥岩で、鋳型としてはあまり適切な石材選択でなく、実際に鋳湯はなされていない。玉砥石に転用されているが、武器形鋒部が彫り込まれている。鋳型かどうか、また該当する製品にも諸説あるが、鋒部幅や横断面から復元される厚さから、平形Ⅰ式銅剣か近畿型Ⅰ式Ｂ類銅戈が想定できる（西岡・川上編 2010）。

３　柳沢銅戈群の意義

以上の整理から、柳沢銅戈は九州型の中細形Ｃ類１本と、近畿型Ⅰ式７本からなる資料群とできた。

（１）銅戈の年代

このような銅戈の年代について、現在において絞り込める範囲を示そう。

中細形Ｃ類銅戈は、副葬例として福岡県三雲南小路１号甕棺（後藤 1981、柳田編 1985）と佐賀県久里大牟田２号甕棺（中島編 1980、井上・松浦 1993）があり、前者は中期末葉、後者が中期中葉を示し、中期中葉段階で中細形Ｃ類銅戈の出現が確実である（岩永 1994）。また、中細形Ｃ類銅戈を含む埋納一括出土例において、福岡県隈・西小田遺跡第７地点と同三並ヒエデ遺跡で、円筒形土器が伴出している。前者は中細形Ｂ類 20 本・同Ｃ類３本が出土し（草場編 1993、柳浦編 2004）、後者は現存中細形Ｂ類３本・同Ｃ類１本ながら出土時には 17 本存在したことが伝えられ、円筒形土器内面には緑青が付着し、銅戈との共伴が確実である（伊崎 1999）。これらの円筒形土器は、胴部が下膨らみでやや上げ底気味の平底。口縁はやや内傾しつつ直立し、口縁から３cm ほど下がったところに断面コの字形の突帯を巡らす。器高は 40cm 前後。隈・西小田では、中期末頃に位置づけられる、やや内湾した口縁部の平底の鉢が蓋として被さったらしい。円筒形土器自体の類例も、中期末頃に求められるようである（伊崎 1999）。したがって、現状において中細形Ｃ類銅戈は、北部九州において中期中葉には出現して中期末頃まで存続を確認することができることになる。

一方の近畿型Ⅰ式は、本柳沢遺跡における出土状況からの絞り込みを除いて、直接年代が求められる出土情報を伴う例がない。近畿型Ⅰ式に位置づけられた三ツ俣銅戈にしても、出土遺構は古墳時代後期にまで降る。八木連西久保銅戈は、弥生時代後期樽式の時期であるが、近畿型Ⅰ式であるとまでの断定には到っていない。中期前半から中頃の雲井鋳型状石製品、Ⅳ期前葉の服部鋳型についても同様である。

ただし、近畿型Ⅰ式の時期を直接限定できないながら、後続するⅡ式あるいはⅢ式の時期から、下限を明らかにできる。まず、大阪府瓜生堂遺跡において、近畿型Ⅱ式Ａ１類の完形銅戈が、近畿第Ⅳ様式の河川堆積層から出土している（村上・三好 1996）。また、大阪府久宝寺遺跡では、Ⅱ式Ａ２類あるいはⅢ式に再加工を施した小型青銅利器が、中期末葉から後期にかけての過渡的な様相をもつ土器を伴って土坑から出土している（三好 1987・1993）。さらに、兵庫県幡多遺跡行当地地区では、近畿型Ⅱ式Ａ２類と最終末のⅢ式を含む破片群資料が土坑から出土している。銅戈の出土状況については、「下層と上層の境付近に規則性なく散在していた。出土した土器は少なく、図化も困難であるが、下層はⅣ様式－３後～４前、上層はⅣ様式－４と思われる。」と報告されており（定松 2009）、中期末葉には近畿型銅戈の最終末型式が破片となり廃棄されるに到っていることを確認できる。したがって、近畿型Ⅱ・Ⅲ式銅戈が、既に中期末葉に存在し、さらにその時間内に廃棄されていることになり、当然近畿型Ⅰ式が登場する下限は、中期末葉を降らないことになる。

残るは上限をどこまで遡らせることができるかだが、服部鋳型が近畿型の範疇で理解できるなら、中期末葉前半までは想定可能となる。さらに、同出中細形Ｃ類の現状での上限中期中葉段階まで遡及できるかは、近畿型銅戈成立の系譜と背景を詳細に検討する必要があり、なお直接資料を欠くのが現状である。ただ、近畿型Ⅰ式からⅡ式への型式学的格差からは、それなりの時間が推量されてよかろう。

以上、関連資料等の検討から、柳沢銅戈８本のセットは、早ければ中期中葉に遡って、遅くとも中期末葉には形成されていた可能性が高い。

（２）銅戈の将来

銅戈自体の時期がなお定かでない制限があるものの、銅戈が弥生時代信濃の地にまで将来されていることは紛れもない事実である。あるいは青銅器生産技術導入の可能性も否定できるものではない。以下では、銅戈将来の背景について、若干の考察を加えておきたい。

まず、中細形Ｃ類銅戈は北部九州の地で製作され、信濃柳沢の地へと将来されたものである。そもそも、細形銅戈以来、九州型銅戈の東方への波及は、これまで大きくは評価されてこなかった。細形で岡山県出土を最東例とみることができ、中細形では島根県１例、広島県１例、高知県５例、中広形・広形でも高知県各１例が中四国地方以東でこれまで確認されてきた九州型銅戈にすぎない。つまり、柳沢１号銅戈を除いて、九州型銅戈は中部瀬戸内を越えて東伝していないのである。そのような状況において、長野柳沢の地に九州型銅戈が将来されている意義は小さくない。

一方で、近畿型銅戈７本の製作地と将来経路がより大きな焦点である。これについて吉田（2006・2011）では、福田型銅鐸、中細形Ｂ’類、同Ｂ”類銅剣と近畿型銅戈Ⅰ式の親縁性を認め、これらを「北部九州圏においては、自らは積極的に受容しない、かつ取り扱い方も異なる青銅器を製作し、もっぱら北部九州圏から中・四国地方以東へと搬出していた」として、自らも受容する通有の第Ⅰ種青銅器群と区別して第Ⅱ種青銅器群とし、中期中葉頃に位置づけた。この理解に基づくなら、近畿型銅戈も北部九州で製作され、おそらく九州型銅戈とともに信濃の地に将来されたことになり、中間者を介さない北部九州と信濃の長距離交流が想定されることになる。しかし、北部九州における九州型中細形銅戈と近畿型Ⅰ式銅戈の作り分けが前提となり、反論も少なくない。

他方、雲井鋳型状石製品あるいは服部鋳型が近畿型Ⅰ式に相当するなら、近畿地方で近畿型Ⅰ式銅戈の生産を既に開始していたことになり、中細形Ｃ類銅戈は北部九州から、近畿型Ⅰ式銅戈は近畿からの将来、その場合でも中細形Ｃ類が北部九州から信濃へ直接もたらされたとも、中細形Ｃ類銅戈が一旦近畿を経由

して将来されたとも、想定できる。

型式学的検討で示したように、やはり近畿型銅戈の系譜が焦点となり、製作地特定の結論はなお留保せざるを得ない現状である。ただし、福田型銅鐸を論じた北島（2004）が提起した「相互干渉作用」といった、青銅器文化における東西交流が、近畿型銅戈はじめ第Ⅱ種青銅器群の前提であり、その第Ⅱ種青銅器群を契機に、次の段階に平形銅剣や中細形Ｃ類銅剣等といった定型化した地域型青銅器が成立する（吉田2011）。このような日本列島青銅器文化のダイナミックな東西交流、その最東が信濃の地にも及んでいたことを雄弁に物語る、それが柳沢遺跡出土銅戈である。

【参考文献】

伊崎利秋　1999「福岡県夜須町出土の銅戈」『甘木市歴史資料館報』第１集

井上洋一・松浦宥一郎　1993「東京国立博物館保管の佐賀県唐津市久里大牟田遺跡出土の矛について」『ＭＵＳＥＵＭ』509

岩永省三　1980「弥生時代青銅器型式分類編年再考－剣矛戈を中心として－」『九州考古学』55 号

岩永省三　1994「日本列島産青銅武器類出現の考古学的意義」『古文化談叢』第 33 集

大場磐雄　1949「信濃国安曇族の考古学的一考察」『信濃』Ⅲ - 1 - 1

大橋信弥・山崎秀二編　1986『服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ』滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・滋賀県文化財保護協会

北島大輔　2004「福田型銅鐸の型式学的研究－その成立と変遷・年代そして製作背景－」『考古学研究』第 51 巻第３号

桐原健　2007「海ノ口銅戈と派出する問題」『仁科路』第 118 号

草場啓一編　1993『隈・西小田地区遺跡群』筑紫野市埋蔵文化財調査報告書第 38 集

後藤直　1981「青柳種信の考古資料（一）－三雲南小路と井原鑓溝に関する資料－」『福岡市歴史資料館研究報告』第５号

小安和順　1995「甘楽町三ツ俣遺跡出土の銅戈」『群馬考古学手帳』５

定松佳重　2009「淡路島出土の青銅製祭器について－大阪湾型銅戈の出土を通して－」『間壁葭子先生喜寿記念論文集 考古学の視点・兵庫県発信の考古学』

長井正欣・湯原勝美編　1999『八木連西久保遺跡・行沢大竹遺跡・行沢竹松遺跡・諸戸スサキ遺跡』妙義町教育委員会

中島直幸編　1980『久里大牟田遺跡』唐津市文化財調査報告第１集

難波洋三　1986「戈形祭器」『弥生文化の研究』第６巻 道具と技術Ⅱ

西岡誠司・川上厚志編　2010『雲井遺跡第 28 次発掘調査報告書』神戸市教育委員会

三木文雄　1969「大阪湾型銅戈について」『ＭＵＳＥＵＭ』223

三好好一　1987「久宝寺遺跡出土の青銅製品」『久宝寺南（その１）』大阪文化財センター

三好好一　1993「金属器・鋳造関連遺物」『河内平野遺跡群の動態Ⅵ 南遺跡群弥生時代中期編』大阪文化財センター

三好孝一　1997「大阪湾形銅戈考」『伊達先生古稀記念古文化論叢』

村上富貴子・三好孝一　1996「金属器・熔笵」『河内平野遺跡群の動態Ⅲ 北遺跡群弥生時代中期編』大阪府文化財調査研究センター

森田礼子編　2005『東京国立博物館図版目録 弥生遺物篇（金属器）増補改訂』

守山市教育委員会編　2001『弥生のタイムカプセル　下之郷遺跡』

両角守一　1933「北安曇郡平村諏訪神社の銅剣」『信濃』Ⅰ - 2 - 1

柳浦俊一編　2004『青銅器の同笵関係調査報告書Ⅰ－武器形青銅器－』島根県古代文化センター調査研究報告書 19

柳田康雄編　1985『三雲遺跡－南小路地区編』福岡県埋蔵文化財調査報告書 69

柳田康雄　2008「銅戈の型式分類と生産・流通」『古代学研究』第 180 号

柳田康雄　2011「朝鮮半島における銅戈の鋳造技術」『アジア鋳造技術史学会研究発表概要集』５号

吉田広編　2001『弥生時代の武器形青銅器』考古学資料集 21

吉田広　2006「武器形青銅器の流通と地域性」『歴博国際シンポジウム 古代東アジアの青銅器文化と社会－起源・年代・系譜・流通・儀礼－ 発表要旨集』

吉田広　2010「弥生時代小型青銅利器論－山口県井ノ山遺跡出土青銅器から－」『山口考古』第 30 号

吉田広　2011「武器形祭器」『講座 日本の考古学６ 弥生時代（下）』

力武卓治・横山邦継編　1996『吉武高木遺跡Ⅷ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 461 集